



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ニコラエフスク空港1遺跡の竪穴住居址と出土資料
Author(s)	臼杵, 勲; 熊木, 俊朗
Relation	オホーツク文化形成期の諸問題 = Problems on the formative stage of the Okhotsk culture
Citation	北海道大学総合博物館研究報告, 1, 53-60
Issue Date	2003-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38400
Type	departmental bulletin paper
File Information	no1_p53-60.pdf



ニコラエフスク空港 1 遺跡の竪穴住居址と出土資料

臼杵 勲・熊本俊朗

Some Problems on Materials Excavated at the Nikolaevsk Airport 1 Site

USUKI Isao and KUMAKI Toshiaki

In this article, the authors intend to introduce a resume of the excavation at the Nikolaevsk Airport 1 site and to review some problems on materials excavated at that site in discussing the distribution and transformation of Okhotsk culture.

In 1998, the authors discovered pit dwellings at the Nikolaevsk Airport 1 site at Nikolaevsk na-Amure city in the Khabarovsk region of the Russian Federation, and gathered a fragment of Tebakh culture pottery which resembles that of the Okhotsk culture. Therefore, in order to recognize the aspect of Okhotsk culture in the Amur river estuary area, the authors excavated one of the pit dwellings in July, 2001.

It is pentagonal in shape, and much resemble the shape of Okhotsk culture residence. Many potteries unearthed belong to the Enoura-A style found in Sakhalin. However, other types made by the paddling technique were also excavated simultaneously. It was thought that such a technique was traditional in Amur estuary area. It was able to confirm that two pottery making traditions, Sakhalin tradition and Amur estuary tradition, existed together for the same time in Okhotsk culture time.

Moreover, two small bronze bells, which are Mokhe-Jurchen culture type ones, are noticeable. They indicate that trade route from Amur river basin to Hokkaido in Okhotsk culture time went through Amur river estuary.

By analyzing the above materials the authors conclude that Tebakh culture in Amur river estuary area is regional variation of Okhotsk culture, and uniquely developed apart from Sakhalin and Hokkaido in latter period of Okhotsk culture.

1. 遺跡の発見と調査

アムール河口部はロシア極東とサハリンが最も近接する地域であり、日本列島と大陸を結ぶ「北回り」の交流を解明する上で注目を集めてきた。特に古代の環オホーツク海地域に展開するオホーツク文化の研究では、ヤクーチャ・オホーツク海北西岸・アムール下流域・サハリンの各地域の諸文化が接する、非常に重要な地域に位置づけられる。しかし、当地域ではこれまで若干の発掘調査

と試掘調査が行われているにすぎず、考古学的内容の全体は把握されていない。

ニコラエフスク空港 1 遺跡は、ロシア連邦ハバロフスク地区ニコラエフスク・ナ・アムーレ市の西郊、ニコラエフスク空港の南に位置する。1972 年にゲェルース (Гельс 1977) の調査で遺跡が確認され、1998 年 7 月に日ロ共同の一般調査で竪穴住居を確認した (臼杵他 1999)。その際に竪穴周辺で、オホーツク文化土器に類似する土器片を採集し、竪穴がこの時期のもので、アムール河下流

におけるオホーツク文化併行期の様相を明らかにするための良好な資料と考えられた。そこで、2001年7月に、(財) 平和中島財団 2001 年度アジア地域重点学術研究助成(課題:「間宮海峡先史文化の復元と日本列島への文化的影響」, 研究代表者: 佐藤宏之(東京大学助教授))を受け、ハバロフスク郷土誌博物館との共同発掘調査を実施したのである。発掘の成果については、現在整理作業を進めながら検討中であり、詳細な内容については、次年度に成果をまとめ、報告書を刊行する予定である。そのため、本稿では、この調査の概要、現時点までに判明した点、今後の課題について述べるにとどめる。最終的な遺構・遺物の評価等については、報告書刊行の段階で明らかにする予定であり、あくまで作業経過中の中間的な評価であることは留意されたい。

2. テバフ文化とオホーツク文化

オホーツク文化の類似資料がアムール河口部に存在することは、コズイレヴァ(Козырева, Р.В.)により早くから指摘されていた(Козырева 1967:100)。ハバロフスク教育大学のコピチコ(Копытко, В.Н.)は、アムール河口地域の一般調査資料を基礎に、初期鉄器時代文化として、テバフ文化を提唱した(Копытко 1989)。この指標遺跡であるテバフ遺跡の採集資料については、臼杵もロシア科学アカデミーシベリア支部考古学・民族学研究所保管資料を紹介し(臼杵 1990)、その土器がサハリンのオホーツク文化の土器に類似すること、2つの群に大別でき、サハリンの江の浦A式と南貝塚式に対応することを指摘した。その後、ロサン(Лосан, Е.М.)はアムール河口部において、一般調査と発掘調査を継続し、スターラヤ・カコルマ遺跡、チリヤー3遺跡等でテバフ文化の存在を確認している。特にスターラヤ・カコルマ遺跡では、テバフ文化期の地上住居址と、一括資料を確認したことが重要である(Лосан 1996)。また、調査成果に基づき、臼杵のⅠ群とⅡ群が単純な時期差ではないことも指摘している。次いで、デリュエギン(Дерюгин, В.А.)はコピチコのテバフ文化の内容に時期の異なる遺物が混在することを指摘し、ロサンの成果や自らの調査成果を用いて、オホーツク文化に関

連する土器群を抽出し、テバフ文化土器を考察した(デリュエギン 1999)。そして、テバフ文化土器を、オホーツク文化系統(江の浦B・江の浦A式)と格子目型押文系統の2系統に区分して編年を組み立てた。オホーツク文化系統については、江の浦B式→江の浦A式→南貝塚式という、サハリンと同様の変化がたどれることを指摘した。またスタンプ文土器について、彼は、a類(丸底)→b類(中間型)→c類(平底)という変遷を考え、c類が江の浦A式と同時期と考えた。これについて、臼杵は2系統の区分と江の浦A式との併存を認めたが、格子目型押文系統については、オホーツク文化土器との類似からc類からa類という逆の変遷を想定し、c類が江の浦A式、b類が南貝塚式と併行すると考えた(臼杵 1999)。また、アムール河口部の南貝塚式土器については、出土遺跡や量が限られることから在地産ではなく、サハリンから運ばれたものと考えた。このように、研究者により食い違いは存在するもの、上記の研究により、テバフ文化がサハリンのオホーツク文化と強い関連を持ち、オホーツク文化の起源・展開を考える上でテバフ文化の資料が欠かせないことは、これまでに確認され、共通認識となっている。ただし、明確な発掘資料が限られているため、テバフ文化とオホーツク文化の関係の具体的な内容は、まだ不明確な部分が多い。ニコラエフスク空港1遺跡の発掘調査は、このような問題の解明を目的として行われたのである。

3. ニコラエフスク空港1遺跡の立地と竪穴住居址

ニコラエフスク空港1遺跡は、ニコラエフスク空港の南、アムール河畔の水面との比高約10mの段丘上に立地する(図1)。現在、周囲は別荘地となり、住宅と畑地が広がっている。周辺の畑地には広く遺物が散布しており、遺跡全体はかなりの面積があったようである。1998年度の一般調査(臼杵他 1999)では、2基の竪穴住居址と思われる凹みを確認し、そのうちの段丘縁に位置する大型の1基内からオホーツク文化の江の浦A式に類似する土器片を採集している。2001年の調査では、この大型の凹み1基の発掘を実施した。遺物としては、住居址の内外からオホーツク文化

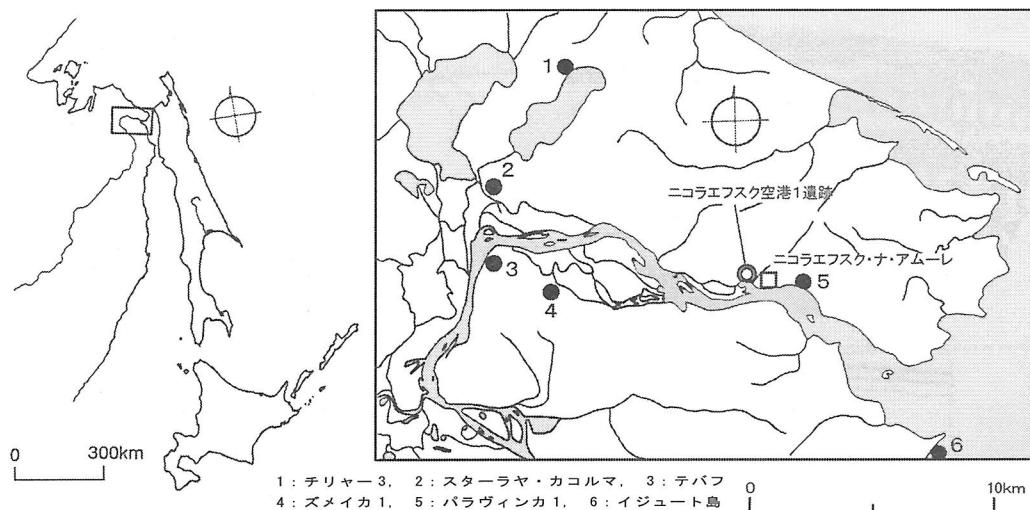


図1 アムール河口部 ニコラエフスク空港1遺跡と同時期の主な遺跡

併行期の土器、石器、土板、青銅製鐸等が出土した。なお、住居址の調査終了後、住居址下層の初期鉄器時代と考えられた文化層を一部掘り下げ、地山面まで完掘した。この層からは、オホーツク文化期より前の初期鉄器時代文化の土器・石器が出土した。

住居址は、南側がアムール川に面した段丘面に立地しており、現在の地形では段丘の縁にほぼ接する位置にある。住居址の大きさは長軸約10m、短軸約8.5mである（図2）。攪乱のため平面形に不明な部分があるが、確実な部分から復原するかぎりでは、住居址の形は5角形に近く、長

軸先端の北北西側、すなわち内陸側の方向に5角形の頂点がある。長辺の壁は、内陸側の頂点に向かって僅かにすばまる形をしているようである。現地表面から床面までの深さは住居址中央部で約30cm、壁際で50～80cmである。住居構築当時の地表面からの深さを考えると、掘り込みは多少浅めといえるかもしれない。柱穴は、長軸中央ライン上に数カ所確認されているほか、南側の短辺の壁から2mほど内側の地点で、長軸と直交するライン上に数カ所確認されている。炉は住居址のほぼ中央に確認されている。炉の構造は、長軸にほぼ沿って粘土による土手状の高まりが2列

構築されている特異なもので、その「土手」に挟まれた部分に焼土のまとまりが2カ所確認された。「土手」を含む炉全体の大きさは約2.7×1.8mである。以上のほかに住居址に伴う施設は確認できなかった。特に、北海道のオホーツク文化住居址に特徴的にみられる貼床・周溝・骨塚等は検出されていない。しかし、外形、炉の位置は、オホーツク文化の住居址に共通する。柱穴については、主柱穴が長軸上に並ぶ点は、オホーツク文化に近いが、壁際や床に小柱穴が配置されないなど相違点も多い。



図2 竪穴住居址

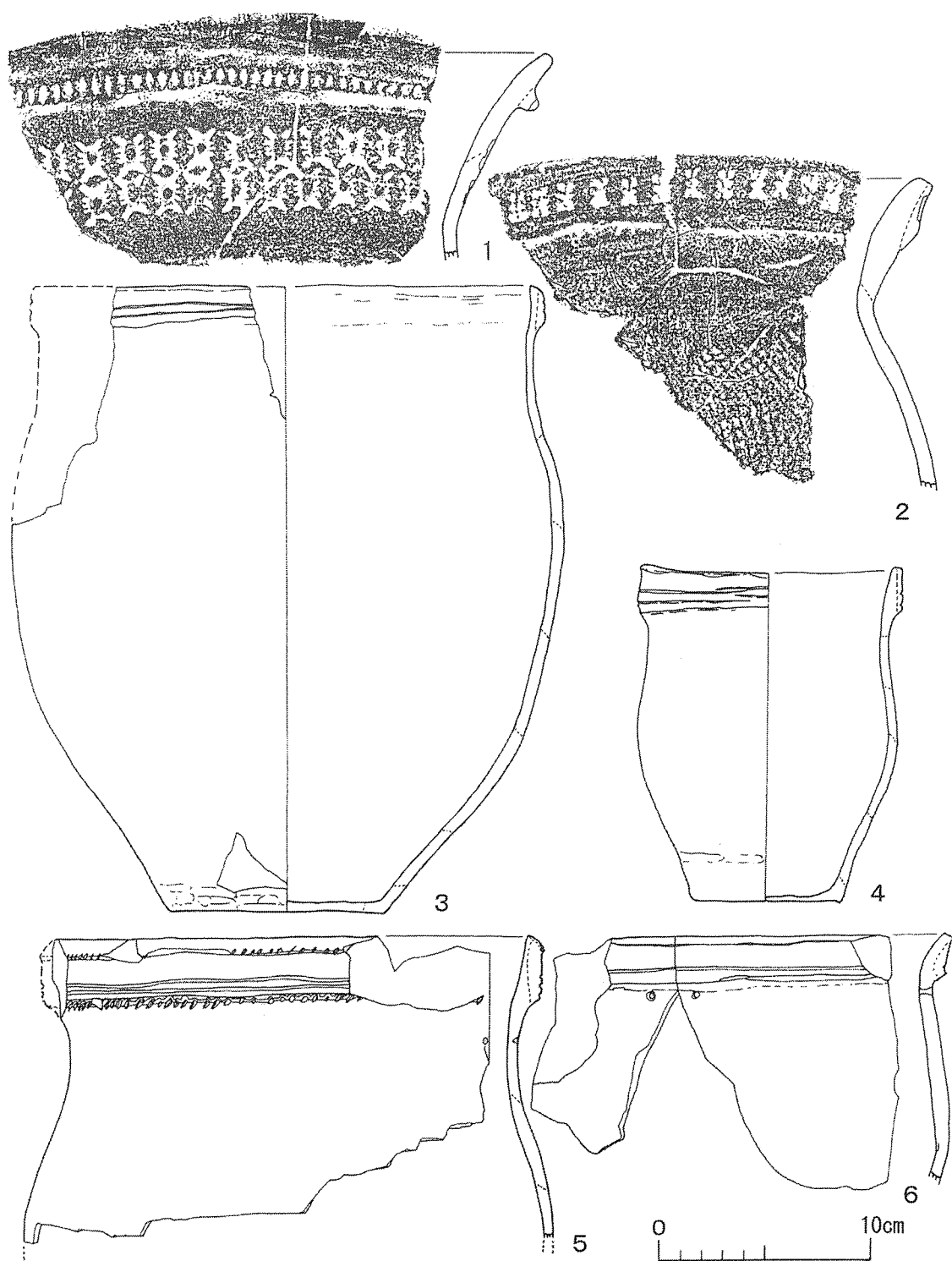


図3 出土土器

遺物の出土状況であるが、完形土器・半完形土器の多くは住居址覆土や住居址外から出土しており、床面出土の土器はやや少数である。層位と土器型式の関係については現在整理中であり、遺物出土状況から推測される遺跡の形成過程や、住居

址の詳しい時期に関しては本報告で明らかにしたい。また、後述のように青銅製の鐸が2点出土しているが、それらも住居址覆土出土である。

4. 出土品について

上記のように整理作業進行中の段階のため、本稿では全容を述べる事ができないので、時期決定の決め手となる土器と、靺鞨系文化との関連を示す青銅製小鐸のみについて、現時点で確認できた知見と問題点をまとめておく。なお出土品の種別は、土器・土製品（土板）、石器・石製品（石錘、軟玉製環等）、金属器（鉄小片、青銅製鐸、座金具等）である。

土 器

ニコラエフスク空港1遺跡では、住居址内外から、沈線文・刻文・指圧式浮文を主要文様とする江の浦A式類似土器（図3-3～6）、が主となって出土した。他に、江の浦B式類似土器、格子目型押文系c類（図3-1）・b類もみられる。なお、図に示した土器では、1が住居址床面、2は表土、3～6は住居址外である。南貝塚式と、a類（砲弾形丸底土器）は全く出土していない。これらの出土状況・共伴関係は、デリュエギンと臼杵の想定した両系統の併行関係を裏付けており、また、南貝塚式が、臼杵の想定したb類ではなく、a類と併行することを示している可能性もある。土器の胎土は、金雲母が多く含まれるこの地域に特徴的なものがほとんどであり、ほぼ全て搬入品ではなく在地の生産品と考えられる。

注目されるのは図3-2の資料である。口縁部肥厚帯上に型押文を連続させる土器で、器形は頸部のしまる深鉢形で、サハリンの江の浦A式に近いオホーツク文化系の特徴を持つが、胴部には格子目型押文（叩き目）が覆っている。つまり、江の浦A式併行期に、格子目型押文系の製作技法（叩き整形）が、オホーツク文化系の土器製作にも取り入れられたことを示す例と考えられる。このことから、オホーツク文化系・格子目型押文系の共存は、土器製作技法上の交流の存在から判断して、在地品と搬入品という関係ではないことが明らかである。ただし、同種の土器片はこの他にも若干数出土しているが、全体としては非常に少ない。

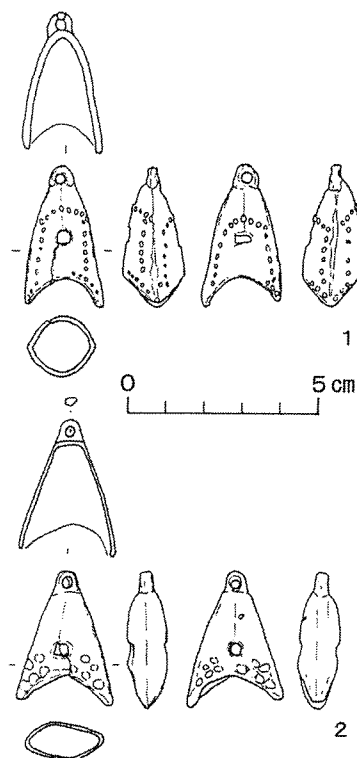


図4 青銅製鐸

金属器

住居址内の覆土から、2点の青銅製鐸が出土した（図4-1・2）。共に、長3.6cm前後で、正面形が三角形で頂部に鈕が付く、下端が弧状に湾曲し2個の突起をもつ。両面に方形の窓を有し、表面には珠文列が下縁沿いと窓の周囲に鑄出されている。1は、片側の窓部に湯が回りふさがっている。2は鑄上がりやや悪く、珠文が不明瞭である。両者とも、型の合わせ目痕跡から判断して、鈕と鐸身は口ウ付けではなく同鑄で製作されている。同様の鐸はこれまで枝幸町目梨泊遺跡や根室市弁天島遺跡など北海道のオホーツク文化遺跡でも出土しており、軟玉製環などとともに「大陸系遺物」として極東の靺鞨文化やアムール女真文化などの出土品と対比されてきた（菊池1995）。アムール流域ではアムール女真文化あるいはバクロフカ文化とされるドゥバヴォーエ遺跡、コルサコフ遺跡で出土している。靺鞨系遺物を代表する方形透彫帯金具との関わりでは、臼杵の編年でⅢ期以降のものと共伴する（臼杵2000）。8世紀後半から9世紀代のものと思われる。オホーツク文化期に北海道で出土する大陸系遺物の多くは靺

靺鞨系文化からアムール流域を通してもたらされたと考えられてきたが、ニコラエフスク空港1遺跡の靺鞨系遺物は、アムール河口からサハリン北部を経由するルートが、流入経路の一つであったことを確実に示す資料である。

5. 調査の成果と課題

今回の調査で出土した土器の中で、オホーツク文化系統の土器は、江の浦A式類似土器が主である。この時期の住居はサハリンでも報告例が少なく、一括品の典型例の一つとできる。ただ、サハリンの江の浦A式は、口縁部肥厚帯の文様に、刻文・沈線文が主のものと型押文が主のものが存在し、南貝塚式との比較で言えば、後者の方が新しい要素と考えられる。この調査では、口縁下に型押文を持つ土器が量的に少ないので、江の浦A式の前半期を中心とする資料といえそうである。格子目型押文系統の土器はb類・c類が主となっており、このどちらかあるいは両方が江の浦A式類似土器と共伴する可能性が高い。白杵案のようにc類からb類という変遷を想定するならば、b類は江の浦A式でも後半段階の型押文土器と併行することになるであろう。そうすると、アムール流域では江の浦A式併行期から、はやくも地域的な土器が存在したことになる。ここで注目されるのは、肥厚帯の型押文は格子目型押文系においてすでにc類で存在するので、格子目型押文系からオホーツク系へ導入された要素である可能性が高くなる。そうするとサハリンの江の浦A式・南貝塚式の型押文についても、アムール河口部の影響を考える必要があることになる。なお、以上の知見を勘案して、現在図5のようなテバフ文化土器編年試案を考えている(図5)。ただし、このような組列が妥当なものかどうかは、他の時期の一括資料や層位関係などの資料を増やしながら検討しなくてはならない。格子目型押文は、少なくともサハリン・北海道のオホーツク式土器にはない製作・施文技法であり、その系統や起源については、アムール下流域のポリツェ文化や靺鞨系文化、あるいは北方のヤクーチアからの影響なども考慮すべきであり、オホーツク文化併行期以前や、周辺の土器についての情報も、さらに必要である。

また、江の浦A式に先行する江の浦B式の類似

土器についても、すでにいくつかの遺跡で確認されており、江の浦B式以降には確実にオホーツク文化がこの地域に分布していたと考えてよい。一方、鈴谷式・十和田式に対応する資料は確認されていない。江の浦B式併行期の段階でサハリンから集団が移住してきたのか、あるいは江の浦B式の成立が、サハリンとアムール河口部の両地域の在地集団を取り込む形で行われたとするのか、オホーツク文化の成立や起源の問題とも関連する課題が残る。

さらに、アムール河口部におけるオホーツク文化系と格子目型押文系の両者の共存や、北海道・サハリン・アムール河口部の土器の斉一化と地域化という現象が、どのような集団や社会の状況を反映しているのかも、これからの課題である。オホーツク文化全体の斉一化・地域化の問題とも関わり、編年や出自の問題と同時に検討していかなくてはならない。

現在明らかなのは、江の浦A式併行期(格子目型押文系b類)の段階から地域化が進行し、本稿の編年案によるならばスターラヤ・カコルマ(格子目型押文系a類)の段階では、一括品中にオホーツク文化系の土器がすでに存在せず、今回の編年試案では南貝塚式の段階で完全に地域化が進み、南貝塚集団とは別の地域集団へと変化したと考えられることである。道北、道東などとの併行関係などの整理が必要であるが、沈線文系土器、貼付文土器の出現期などから考えてみると、8世紀からのオホーツク文化内の地域化の進行と連動した動きといえそうである。

サハリンにおける十和田式から江の浦B式への変化は、単純な文様の変化のみではなく、製作技法、器形、組成という土器の様々な面における変化であり(前田1976: 7-14)、しかも同様な現象が北海道までを含めた広い地域で起き、斉一化が起きていることは重要である。さらにそれが、靺鞨文化の明らかな影響下に起きていることも指摘されている。集団の入れ替わりを想定しないのならば、これはオホーツク文化集団側の明らかな意図である。しかし、一方で次の江の浦A式の段階ですでに地域化が開始されていることが、今回の調査から明らかになった。続く南貝塚式期では、単純に土器だけを比較すると地域化がさらに進行し、サハリン・北海道・アムール河口部に、

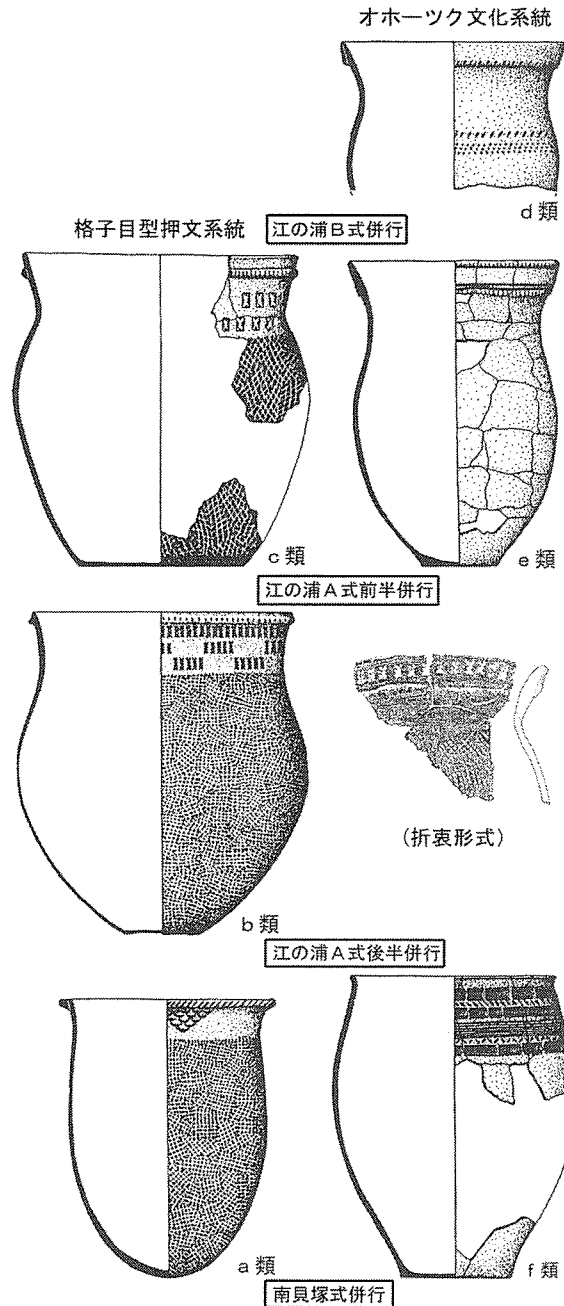


図5 テバフ文化土器編年試案

伝統や規範が共通する同一の文化が広がるというような枠組の想定すら困難となる。以上のような状況が、各集団のどのような背景を反映しているのかを、今後考えていく必要がある。

今回の調査により、テバフ文化には、土器や住居形態など、オホーツク文化と共通する要素が存在することが明らかとなった。また、靺鞨系文化からの金属製品の流入という点でも共通性が高い。しかし、住居址の施設や土器についてはこの

地域独自の要素が存在することも確認された。つまり、これまでのオホーツク文化の概念とは異なる要素も、テバフ文化の中に存在している。特に、内陸に約100kmの地域までテバフ文化の遺跡が分布し、アムール本流をはずれた湖水地域にも集落が存在するなど、海洋適応というオホーツク文化の枠組をそのまま適用した解釈は困難であると思われる。この点では、河口部における集落・生業の内容の解明が今後の重要な課題となる。今

後は石器や遺跡立地などの比較から、生業活動における共通点や差異にも、注目していく必要がある。土質の問題で、オホーツク文化に特徴的な骨角器や動物遺体の比較が困難であるが、テバフ遺跡では動物骨が出土しているとの記載もあり（Окладников 1980: 38）、保存条件のよい遺跡を探して比較できる可能性も残されている。もちろん、オホーツク文化とテバフ文化という従来の枠組み自体にも再考が必要となろう。今後、サハリン・北海道の資料の検討や、アムール河口部での調査と文化編年の整備を進めるなかで、これらの問題も解決していかなくてはならない。

また、靺鞨系遺物である青銅製鐸の確認は、テバフ文化が、サハリン、北海道とアムールを繋ぐ位置にあり、流通の経過点であることを確実に示したといえる。デリュージン・熊木・福田らの大陸側のタタール海峡沿岸部の調査では、オホーツク関連資料が確認されておらず（福田他 2002）、オホーツク文化期の大陸との主要ルートは、やはりアムール河口部を介し、北サハリンを経由する行程である可能性が高まったといえる。近年、北海道の日本海側において大陸系遺物が確認され、大陸からの直接ルートを考える意見もあるが、奥尻島青苗砂丘遺跡などでの十和田式段階の遺跡の確認や、その他の日本海側におけるオホーツク関連資料の増加などを考慮すると、やはりオホーツク文化を経由した流通・交流と考えるのが妥当性が高いといえる。

参考文献

- 白杵 勲 1990 アムール河下流テバフ遺跡出土土器について『古代文化』第42巻第10号: 48-59
- 白杵 勲 1999 「アムール河口部のテバフ文化土器」『物質文化』第66号: 31-34
- 白杵 勲 2000 「靺鞨－女真系帯金具について」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』東京堂出版: 1078-1095
- 白杵 勲・熊木俊朗・デリュージン・スピジェヴォイ 1999 「1998年度アムール河口部（ニコラエフスク地区）一般調査報告」『北海道考古学』第35輯: 33-46
- 菊池俊彦 1976 「オホーツク文化に見られる靺

鞨・女真系遺物」『北方文化研究』第10号: 31-117

デリュージン, V 1999 「アムール河口部におけるオホーツク文化併行土器の分類・編年」『物質文化』第66号: 20-30

福田正宏・デリュージン, B. A. ・熊木俊朗・江田真毅 2002 「2000年度間宮海峡沿岸部（ソビエツカヤ・ガパン周辺）考古学的調査」『北方探求』第4号: 38-63

前田 潮 1976 「オホーツク文化の確立過程について」『史学研究』第106号: 1-21

Герус, Т.А. 1977 Исследования древних культур нижнего Амура. *Исследования по археологии Сахалинской области*, pp. 38-53. Владивосток.

Козырева, Р.В. 1967 *Дрениый Сахарин*. Ленинград.

Копытько, В.Н. 1989 Тебаховская культура (некоторые результаты исследований). *Проблемы изучения памятников каменного века и палеометалла Дальнего Востока и Сибири*, pp. 24-28. Владивосток.

Лосан, Е.М. 1996 К вопросу о периодизации Теваховской культуры. *Археология Северной Пацифики*, pp. 372-378. Владивосток.

Окладников, А.П. 1980 О работах археологического отряда Амурской комплексной экспедиции в низовьях Амура летом 1935 г. *Источники по археологии Северной Азии (1935-1976 гг.)*, pp. 3-52. Новосибирск.